

# 中国における禅浄関係

光 地 英 学

一

仏教の宗教的生命は最も鮮活に禅と浄土教に具現されている。人間の現実には弱く罪惡に充ちている。これを自省するものは、自己の外に救済者を求める。そして人間の弱少性を自認せしめるものは、理想態が背景をなっているからであるとなす。これに対し、自心の本源性に注目するものは、理想像を自己の内に認得せんとする。現実態と理想態の二面は人間の性の両面であって、自ら対蹠的である。一は禅、一は浄土の宗教性を示すことはいうまでもない。この相反する二面の仏教が、しかも屢々交渉関係を有することは、人間性に内在する要因として不可思議ともいえるし、又当然のことともいえる。このことを証するものとして禅浄相関史が考えられ

中国における禅浄関係(光 地)

る。

概していえば唐以前の中国仏教は理論仏教であった。雑然として伝訳された大小乗仏教を整理組織して仏意の在るところを明かすべく、教判が選定された。教判は全仏教を宗派の立場から体系化したものであるから、それは学解の仏教の一面、実践を予想するものである。仏教が実践化されることは、その自ら趣く過程である。しかもその実習は簡に要を得る如きものへと進むことも十分諒とされうることである。これに応じたものが唐以後の禅と浄土教であるといえる。が、今は中国唐代までの禅と浄土教の各考察ではなくして、唐代までの禅浄両者の相関史、つまり禅浄交渉史を概観してみたいと思う。

一

## 一一

中国禅浄双修者の嚆矢と考えられるものに、東晋時代の竺僧頭がある。出家後、禅定を修し、後浄土に想いを馳せ、浄土の行業を怠らず修した<sup>(1)</sup>。その念仏は觀想の念仏であつたものと思われ<sup>(2)</sup>。僧頭より約八十年後、両教の双修をなしたのはかの廬山白蓮社である。すなわち東晋安帝元興二年（四〇二）七月、慧遠（三三四—四一六）は般若台精舎の無量寿仏の像前にて百廿三人と共に西方願生の輩を立てた。それではその念仏はいわゆるの四種念仏のうちの何れに相当しているのであろうか。かの「廬山白蓮社誓文」「出三藏記集」「高僧伝」等の慧遠<sup>(3)</sup>等からして、他在の弥陀の身土を認容しているから実相の念仏ではない。さらに竜舒の「浄土文」の奇瑞の記述からして觀想の念仏に相当し、禅定三昧裡の見仏であつたものと思われる。従つて蓮社の念仏は、かの僧頭が病患で、しかも臨終に近い頃漸く禅業を修したのとは遙かに趣きを異にしていた。

以上が中国における禅浄双修の源流である。次にそれ以後の禅浄双修の展開について、概ね時代を追うて局視的な考察を進めてみたい。鳩摩羅什の弟子僧叡は「関中出禅経序」にて自ら云っている如く、羅什に就いて禅法を受け、「坐禅三

昧経」の禅觀を修習し、やがて浄土往生を願求するに至つた。次に留意したいのは禅宗四祖道信である。大医道信（五八〇—六五二）については民国版「楞伽師資記」道信章に「（文殊般若経）善男子善女人、欲入一行三昧、応入空閑、捨諸乱意、不取相貌、繫心一仏、専称名字。随仏方便、所端身正向、能於一仏、念念相続、即是念中、能見過去未来現在仏。何以故、念一仏功德無量无边。」とある。文殊般若経の一行三昧の念仏は、念心に他ならない。念心とは心そのものになりきることである。それは直心の体得である。心そのものを別に起さず、心が心として本来不動であるのをいう。されば道信の文殊般若経による一行三昧は、念仏であると同時に念心であつた。この念仏心とは無所念である。無所念が念仏であり念心であるから、念仏せず念心しないことがその念仏の意味となる。即念無念である<sup>(3)</sup>。いわゆる禅的念仏である。そのところに禅浄一俱の發揮があるものと思われる。道信の資弘忍については、「最上乘論」が注目される。「最上乘論」に「若有初心学坐禅者、依觀無量寿経。端坐正念閉目合口、心前平視随意近遠。作一日想守真心念念莫住」という。「觀経」によつて觀法を初心者に勧めたものである。蓋し坐禅の初入の者は心が散乱しやすいから、その散乱を防ぎ心を一処に専注せしめるために、特に觀経の觀法を依用したものである。しかしこ

の「最上乘論」が五祖の真撰であることについては、若干の問題があるが、真撰である点、概ね間違いないものと思われる<sup>(6)</sup>。しかし元来、五祖の主として依用したのが「金剛經」であるから、「最上乘論」は五祖にて主要な位置を占めるものではない。従ってその念仏禅思想は弘忍の中心的な位置を占めるものではないこととなる。しかし弘忍は純正浄土教の代表者善導と同時代の人であり、唐の太宗高宗から玄宗の時迄が浄土教の最も興隆した時代であるから、当時熾んであった浄土教の代表經典「觀經」を以て初心者修道の善巧方便として依用していたことは、十分諒とされうるし又注目されてよいと思われる。

五祖下智詵系は、智詵―処寂―無相と次第するが、この無相が南山念仏禅者である。無相は無憶・無念・莫忘の三句を以て人々に教え、引声念仏を人々に授けた。その方法は、高声にて一氣に念仏し長く声を引いて次第に微声としやがて無声とする。無声となった後、念を停めるのである。かくして心を仏心に通わせ、声として外に現わしていた仏を内面に向けて己が心中に在らしめる、すなわち声を勝縁として自己の心に仏心を全現せしめるようにする。従って引声念仏の志向するところは、無念に至らしめる、つまり三昧に入らしめるためである。無相の系統では、無念を最も重んじている。この無念に導き、無念を伝えるのに引声念仏を以てしたことが

特色とみられる。引声念仏は一声であったと考えられるが、おそらく無相の発明であろう。処寂(六六九―七三六)の資承遠(七一二―八〇二)は、かの慈愍三歳について念仏三昧を学んだ。元来慈愍三歳慧日(六八〇―七四八)の浄土教には、禅と律とが混淆されている。局視的に云ってその思想は多分に念仏禅的である。慈愍は聖教の説く所の正禅定を以て心を一処に制し、念々相統して、昏沈掉挙を離れ、平等に心を持するにあるとなす。これを行うに助援として念仏・誦經・礼拝・行道・講經・説法等をなす要がある。そしてこれを廻らして浄土往生に向すべきであると主張している。つまり禅を主とした諸行並修で、その目的を往生浄土に置いたのである。慈愍は当時の禅者の態度を排斥したのであって、禅そのものを排斥したのではなく、却って禅と念仏との一致を許容した。承遠は慈愍の念仏禅思想の影響を受け、念仏に重きを置き、その居処を弥陀台と呼ぶほどであった。彼は念仏頭陀の行を修して道俗を教化した。徳宗(七八〇―八〇四在位)は詔して弥陀寺の額を贈った程である<sup>(9)</sup>。これより先、弘法寺迦才(六二七頃―六四九)の「浄土論」巻下第六引、現得<sub>二</sub>往生<sub>一</sub>人相貌<sub>二</sub>に、禅淨を双修した尼僧光靜の次の記述がある。「広陵中寺尼光靜伝云、光靜姓胡、吳興人也。幼而出家、少有<sub>二</sub>高行<sub>一</sub>。恒習<sub>二</sub>禅惠<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>食<sub>二</sub>甘肥<sub>一</sub>。従学<sub>レ</sub>禅者一百余人、恒以<sub>二</sub>念仏清淨<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>業。臨終盛得<sub>レ</sub>殊香異相遍<sub>二</sub>満空<sub>一</sub>」

迎て而卒」。いう如く「浄土論」の直接的な記事ではなくして、光静伝の引用にすぎないし、光静なるものの年代も不明であるが、仏教渡来から比較的早い時代の人であると思われる。しかもこのような双修者のあつたことは看過されてはならないであろう。

さて南嶽の承遠に従つた念仏禪者は法照である。承遠、法照ともに念仏三昧の修習者である。法照は慧遠の念仏行を敬慕し、「観無量寿経」に説く観想を修していたが、靈感により永泰元年（七六五）廬山から来て承遠に従つた。法照の念仏禅思想を表明するものは「浄土五会念仏略法事儀讚」である。この明かすところは、五会念仏の法事の行儀讚文である。五会念仏の五とは数であり、会は集会である。五音が各集会するから五会という。すなわち宮商角徵羽の五種の音声を以て念仏し、緩より急に至り、余念を交えない。五会念仏の基づくところは「大無量寿経」巻上の「清風時発出三五音声」、微妙宮商自然相和」にある。その五会の第一会にては平声で緩く南無阿弥陀仏と念じ、第二会にては平上声で緩く南無阿弥陀仏と念ずる。又第三会にては非緩非急に南無阿弥陀仏と念じ、第四会にては漸く急に南無阿弥陀仏と念ずる。かくしてさらに第五会にて転た急に阿弥陀仏を念ずるのである。この五会の念仏を修するには、その出家であると在家であるかを問わず、美音の者を集め、威儀斉整、端坐合掌、専心

に仏を念じ、調声して念仏する。念に余念がなければ、念すなわち無念で中道実相の不二法門第一義諦に契当するに至るとなすのである。この五会念仏の功德を以て今世にて諸煩惱、苦を除き、菩提を得、来世は極楽に往生せしめるものであるとなしている。<sup>10</sup> いう如く法照の念仏は承遠を承け、後世のいわゆるの口礼念仏ではなくして、口礼と観想念仏を中心とした口称観想併用の念仏である。いわば一種の禅的念仏であるとなしうる。それはその序文中に「念仏三昧是真無上深妙禅門矣」といつていることでも自明である。又、法照その人は屢々入定し、定中阿弥陀仏を拝したといわれるほどであるから、禅定に達していた人であることは明瞭である。

次に牛頭四世の祖師、金陵延祚寺の法持（六三三—七〇二）についてみる。宋戒珠の「浄土往生伝」巻中によれば、十三才弘忍によって心を得、次いで方禅師について禅の真髓を明きらめた。浄土に念を繋げたのは、晩年凡そ九年、俯仰進止、すべてを観想に統攝する宗教生活を営んだ。その念仏は観想念仏で、念仏禅の行者であつた。法持の逝去の日には、空中に神幡数十首があつて日に閃き西に向つたほどであり、先に住していた牛頭山幽棲寺の竹林が皆白く変じたといふ。<sup>11</sup>

以上の念仏禪者を概観するに、慈愍・承遠・法照の系統、法持等の牛頭禅のあることが知られる。百丈大智も浄業を修したという見方がある。しかしこれは頗る疑わしい。<sup>12</sup>

次に居士白楽天の禪淨思想に注目する。彼の禪については如滿の同学惟覚に禪要を問ひ、さらに鳥窠道林に参じている点である。また淨土に關しては最初兜率上昇を願ひ、晩年弥陀淨土を願生している点である。彼が禪と淨土に志を向けたのは何れもその晩年で、殆どその時を同じうしている。従つて彼は禪と淨土との何れをも双修したものであるといわねばならない。

### 三

(一)禪淨の相関には二面がある。禪から淨土教に接近するもの、(二)淨土教から禪に接近するものとする。 (一)の場合、禪にありながら淨土教の信仰を持つものと、淨土教を禪的に融化するものとある。(二)の場合、四種念仏の觀像・觀想・実相の三種の念仏と念仏三昧とがある。上掲三種の念仏は坐禪による觀法であるから、広義の禪であるとなしうる。また念仏三昧は念仏によつて三昧を成就するのであるから、やはりそれは広義の禪であるといひうる。広義の禪ではあるが、淨土行業修習を内容とするものである点、禪淨双修の領域のものと見做しうる。

### 注

- 1 戒珠「淨土往生伝」卷上(統藏第一輯第二編第八套第一冊十  
七葉右下) 高僧伝卷第十一(大正藏五〇・三九五中)
- 2 属想西方心甚苦至。見無量寿仏降以真容光照其身、所  
苦都愈。(高僧伝卷第十一)
- 3 僉心西境(出三藏記集卷第十五—大正藏五五・一〇九下。  
高僧伝卷第六—大正藏五〇・三五九下) 誓茲同人俱遊絶域。  
(出三藏記集卷第十五)
- 4 同卷第五「東晋慧遠法師の項」に、「遠澄心觀想初十一年  
三觀聖像」(淨全六・八六四頁上) 同第五「東晋劉遺民の  
項」に、「依遠公共修淨土、專坐禪作觀想法方半藏即  
於空中見仏光昭曜。……居山十五年、末年又於想念念仏  
中見阿弥陀仏身紫金毫光散照垂手下接以臨其室。云々」  
(淨全六・八六四頁下)
- 5 鈴木大拙博士「禅思想史研究」第一、二五七頁参照
- 6 最上乘論の弘忍偽撰説の近代の代表は、忽滑谷快天博士の  
「禅学思想史」卷上(三七六頁—三七八頁)である。輓近発掘  
された燉煌本(巴里博物館所蔵)の「蘄州忍和尚道凡趣聖悟解  
脱宗修心要論」一卷は、最上乘論であることが確認されてい  
る。なお弘忍真撰説は「禅と念仏」所載、後藤大用師「淨土教  
に対する道元禅師の立場」で論究もされている。
- 7 「東方学報」京都第二册所収、塚本善隆博士「南嶽承遠伝と  
その淨土教」二〇五頁参照

- 8 宇井伯寿博士「禅宗史研究」第一、一八四頁。増永靈鳳博士「禅宗史要」四三頁
- 9 慈愍の伝は宋高僧伝卷第二十九、戒珠「浄土往生伝」卷中、仏祖統紀卷第二十七等所載。慈愍の思想は永明延寿の「万善同歸集」卷上の慧日の語の引用文からも看取される。
- 10 法照は普く道俗に対し「広作五会真声念仏三昧理事隻修、相無相念即与中道実相正觀相応」（「五会法事讚」本、浄全三六・六七三頁上）と勸説している。
- 11 統蔵第一輯第二編第八套第一冊二十八葉
- 12 忽滑谷博士「禅学思想史」卷下、一一頁
- 13 「仏祖統紀」卷第二十八往生公卿伝（大正蔵四十九・二八二中）諸上善人詠（統蔵第一輯第二編第八套第一冊五十七葉左下）